

令和8年度 愛知医科大学大学院看護学研究科 海外研修報告書

氏 名	看護学研究科 慢性看護学分野 下八重和真	研 修 先	マハサラカム大学
学 年	2学年次生	研修期間	2026年8月1日～8月8日
主な 研修内容	マハサラカム病院視察、救急部門・Stroke Care Unitでの見学実習、Stroke Unitでのシャドーイング、マハサラカム大学看護学部での特別講義、看護基礎教育から大学院教育までの教育課程について ケア施設（ナーシングホーム）の視察、研究発表会、 愛知医科大学3名・マハサラカム大学3名による研究発表とディスカッション		
報告内容	1 志望理由と研修での具体的な学び 私は現在、大学院修士課程で「手術を控えた患者におけるアドバンス・ケア・プランニング（ACP）の現状と促進要因」をテーマに研究を進めています。ACPは本人の価値観や家族との関係のうえに成り立つプロセスであり、その進め方は文化や宗教観の影響を強く受けるとされています。異なる文化的背景や医療体制のもとで、どのような意思決定支援が行われているのかを実際に見たいと考え、今回の短期留学を志望しました。また大学病院のICUに勤務する立場から、医療資源や制度の異なる環境で急性期医療がどのように成り立っているのかを確かめたいという思いもありました。 マハサラカム病院では、看護部長をはじめとする看護管理者の方々から病院の概要と救急部門・Stroke Care Unit（以下、SCU）の体制について説明を受けたうえで、両部署の見学実習を行い、現地の大学院生に同行してSCUでのシャドーイングをさせていただきました。SCUでの薬剤師によるインスリン自己注射指導等の場面も見学させて頂き、最も印象に残ったのは、家族が病床のそばに常におり、日常生活援助の一部を当たり前のように担っていたことです。日本のICUでは面会時間が区切られ、ケアは看護師が完結させることが多いのに対し、ここでは家族が最初から治療場の内側に存在していました。意思決定の単位が個人ではなく家族でもあり得るという点は、日本における家族に配慮した意思決定と重なる部分もありますが、タイでは文化的背景が医療体制そのものに組み込まれているのだと考えました。また、脳卒中の搬送・治療システム及びERへの搬送システムや初期診療、プレホスピタルケア等もシステム化されて運用されていることがわかり、その点は日本と類似した運用がなされていることも学びました。 ナーシングホームの視察では、日本の施設との違いを数多く目にしました。まず居室が個室ではなく、複数のベッドが並ぶ開放的な空間で、ベッドの周囲がそのまま入所者の生活の場になっていました。日本では個室やプライバシーの確保が施設の基準として重視されますが、ここでは入所者同士や職員の姿が常に視界に入り、人の気配のなかで日々の生活が営まれていました。一方で、状態が悪化した際の対応は仕組みとして整えられており、医療機関へつなぐ判断や連携の流れが明確に定められていた点が印象に残りました。療養環境の設え方は日本と大きく異なるものの、必要なときに医療につながる体制は確保されており、設備や環境の充実度だけで施設水準を測っていた自分の見方を改めるきっかけになりました。 研究発表会では、自身の研究計画に関する発表を行い、英語で発表しました。非常に緊張しましたが、自己の研究内容や考えを英語でプレゼンテーションしディスカッションするという体験は、とても貴重な経験として心に残っています。現地の学部学生や大学院生との交流も大きな学びでした。歓迎レセプションや見学への同行を通して、学部生・大学院生と互いの教育課程や勤務の実際について話す機会があり、看護基礎教育から大学院教育までを扱った特別講義とあわせて、看護師に与えられている役割や大学院生活をディスカッションする機会にもなりました。英語での意思疎通は決して十分ではありませんでしたが、看護という共通の土台があることで、お互いの想いや考えを伝えることができました。帰国後は、患者を個人としてだけでなく家族という単位のなかで捉える視点と、環境や制度の違いを踏まえて自身の看護実践を見つめ直し、ICUでの看護実践と修士論文の研究双方に生かしていきたいと考えています。 2 海外研修への参加を考えている学生へのメッセージ 海外研修に少しでも関心があれば、語学力が十分かどうかで迷う必要はないと思います。私自身も英語には自信がありませんでしたが、伝えたい内容と相手を知りたいという姿勢があれば会話は続きましたし、現地の学生も辛抱強く付き合ってくれました。やっておくとよいことは、自分の研究や勤務先のことを自分の言葉で短く説明できるようにしておくことでした。また大学受験以来、まともに英語を勉強していなかったので短期間英会話レッスンをしに行ったことも良かったと感じています。日本の医療を外から眺め直す機会は、そう多くありません。観光は一人でも可能ですが、現地の大学や病院を訪れ見学することや、ディスカッションできる機会は中々ないと思います。ぜひ一人でも多くの大学院生がこれを見て、海外研修への参加を決意して下さると幸いです。		

